慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	幼児期記憶の感情と年齢差
Sub Title	Affect and age difference of childhood memories
Author	下島, 裕美(Shimojima, Yumi) 小谷津, 孝明(Koyazu, Takaaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1998
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.47 (1998.) ,p.11- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000047-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幼児期記憶の感情と年齢差

Affect and Age Difference of Childhood Memories

下　島　裕　美*・小　谷　津　孝　明**
Yumi Shimojima ・ *Takaaki Koyazu*

When we remember our own childhood days, we find that we have few memories about the time before the age of three. The aim of this article is to find whether there is any difference among the earliest memories of people at different ages, and also what kind of affect(s) contribute to the earliest memories of people at different ages. The results suggest that (1) for men, there is a significant difference in recalled memories, depending on age, and (2) for the affect of recalled memories, there is a significant difference across age for men. (3) Women recalled more positive memories than men.

自分が幼い頃のことを思い出そうとしてみると，3, 4歳以前の記憶を想起することは困難であることがわかる。この現象を初めて報告したのはFreud (1905/1953)で，この現象は“幼児期健忘 (childhood amnesia)”と呼ばれる。幼児期健忘は，3歳以前の，記憶がほとんど想起できない時期と，3歳から5歳までの，それ以後の年齢に経験した出来事と比べると想起可能な記憶が比較的少ない時期の，2つの時期からなるとされている (Wetzler & Sweeney, 1986)。

幼児期記憶に付随する感情

幼児期の記憶についての研究は古くから行われている。最幼児期記憶はほぼ3, 4歳であり，その年齢は男性よりも女性の方が少し早いといわれてきた (Waldfogel, 1948)。そして，それらの記憶の大部分は明瞭な感情によって特徴付けられているといわれている。しかし，感情についての研究結果は必ずしも一致しておらず，研究者によって異なる結果と説明がなされてきた。

例えば，Waldfogel (1948) では幼児期記憶には肯定的感情が多いとされており，その一方で Dudycha and Dudycha (1933, 1941), Cowan and Davidson (1984) は幼児期記憶には否定的感情が多いとしている。Freud (1905/1953) は隠蔽記憶という観点から幼児期記憶に対する否定的感情の役割を強調する。White and Pillemer (1978), Pillemer (1984) は幼児期記憶は閃光効果によって促進されるという立場をとり，肯定的・否定的両感情の役割を強調している。そしてこの Pillemer らの見解は，Howes, Siegel, and Brown (1993) の実験結果によっても支持されている。

しかしこれらの研究は，感情を肯定的・否定的・中立的という3つの観点からしか捉えておらず，それらの感情の程度については考慮していない。被験者が少しでも肯定的だと考えて答えれば，それは肯定的という強い感情を伴った記憶であると考える。そこで本研究では，肯定的感情から否定的感情までの7段階スケールを設定し，それぞれの感情の程度を考慮に入れたうえで，幼児期記憶の感情について検討する。

幼児期記憶の年齢差

自伝的記憶の年齢による記憶分布の研究では，実験時の年齢によってその分布の形が変わることがわかっている。20代までの被験者の記憶分布は単調増加関数となるが (Crovitz & Schiffman, 1974; Crovitz & Quina-Holland, 1976; Rubin, 1982), 30代以上ではこの関数に

* 杏林大学保健学部（心理学）
** 慶應義塾大学文学部教授（心理学）

当てはまらず (Franklin & Holding, 1977; McCormack, 1979), 少なくとも 3 つのコンポネントに分けることができる (Rubin, Wetzler, & Nebes, 1986)。人生のどの時点で想起を行うのかによって，想起される出来事は異なる。記憶は我々の関心と共に共存し，我々の関心と共に変化するのである (Bartlett, 1932)。

このように，自伝的記憶については，年齢差という視点から捉えた研究が存在するが，幼児期記憶に焦点をしぼった研究は，ほとんどが大学生を被験者としたものであって，被験者の年齢差について検討したものは少ない。そこで本研究では，幼児期記憶を年齢差の視点から捉え，幼児期記憶に付随する感情と，幼児期記憶の年齢とについて，様々な年齢群の被験者の比較を行なう。

幼児期記憶の種類

Usher and Neisser (1993) は，幼児期記憶の妥当性について論じており，幼児期記憶の研究は，想起の確認がとれるような種類の出来事に限定するべきであると述べている。そこで挙げられている出来事のカテゴリーには，兄弟の誕生，引越し，肉親の死，一日以上の入院，がある。彼らは，これらの出来事は，家族や親族に確認が可能であるという点，時間，場所が正確に確認できるという点で幼児期記憶の妥当性を論じる際に有効であるという。これに先んじて，Sheingold and Tenney (1982) は，兄弟の誕生という特定の出来事について調査を行っている。そして，3 歳以前に兄弟が生まれた場合にはその出来事を想起できないが，3 歳以後の場合には想起ができるという結果を示し，これは従来の質問紙法による最幼児期記憶の結果と一致するものとなっている。

しかし，幼児期記憶の妥当性についての多くの研究からは，想起された出来事の多くが正確であることが確認されている (Howes, Siegel, & Brown, 1993)。Usher and Neisser (1993) は，歪みのある記憶を排除するために，出来事を特定した想起を提唱しているが，歪みのある出来事が少数であるならば，想起する出来事を特定する必要があるのであろうか。想起された出来事の内容の正確さ，正確な年齢を調べるためには，確かに想起する出来事を限定することは意味があるかもしれない。しかし，最幼児期記憶のもつ意味について検討する場合にはどうであろうか。限定された想起と自由想起とでは，想起される幼児期記憶の質が変わってしまう可能性がある。その結果，内容分析や，感情の分析が困難になってしまうこともあるであろう。そこで本研究では，自由想起による幼児期記憶の中で，Usher and Neisser (1993) が定めたカテゴリーに含まれる出来事がどの位の率で含まれているかを調べ，出来事を特定する必要性について検討する。

また，Sheingold and Tenney (1982), Usher and Neisser (1993) では，出来事を限定した際の幼児期記憶の臨界期は，出来事を限定しなかった場合と一致するという結果が得られているが，それが Usher and Neisser (1993) の限定した出来事にのみあてはまることなのかどうかについて検討する。Usher and Neisser (1993) が定めた 4 つのカテゴリーに属さない出来事に関しても，同様の結果があてはまるのであれば，4 つのカテゴリーのみに出来事を限定する必要性がなくなる。そこで本研究では，引越し（Usher & Neisser が定めたカテゴリー）と，幼稚園の入園式（Usher & Neisser が定めなかったカテゴリー）という，2 種類の特定の出来事の想起を行う事によって，自由想起による最幼児期記憶と，出来事を特定した場合の最幼児期記憶の違いについて検討する。

まとめると，本研究の目的は以下の 3 つである。

(1) 7 段階評定により感情を評定することにより，感情の程度を考慮に入れたうえで，幼児期記憶に付随する感情について検討する。
(2) 想起された幼児期記憶の年齢と，幼児期記憶に付随する感情について，被験者の年齢差という視点から検討する。
(3) 想起された幼児期記憶の内容と，出来事を限定した想起方法の妥当性について検討する。

方　法

被験者

慶應義塾大学夏期スクーリング参加者に質問紙を配り，後日教室で回収した。また，区民大学心理学受講者に質問紙を郵送し，郵送により回収した。更に，放送大学の学生に質問紙を配り，後日郵送により回収した。記述された出来事が特殊な出来事であり，出来事を経験した年齢が特定できるもののみ分析を行った。

回収された質問紙のうち，被験者の年齢の記入が不備であった 5 名のデータを分析から除外し，計 118 名について分析を行った。平均年齢は 40.61 歳であった。そのうち，20 代は 42 名（男性 6 名（平均年齢 25.0 歳），女性 36 名（平均年齢 23.67 歳）），30 代は 22 名（男性 7 名（平均年齢 33.14 歳），女性 15 名（平均年 33.47 歳）），40–50 代は 35 名（男性 5 名（平均年齢 53.4 歳），女性

30名（平均年齢49.66歳）），60-70代は19名（男性8名（平均年齢68.13歳），女性11名（平均年齢67.26歳））であった。

質問紙

質問紙は表紙を含めた8ページからなっていた。表紙には年齢，性別を記入し，2ページから6ページまでには，最幼児期記憶を3つ，幼稚園に通っていた場合には入園式について，小学校に入学する前に引越しをしたことがある場合には引越しについて，計5つの出来事の想起を行い，1ページに1つの出来事をできるだけ詳しく記入してもらった。次に，7ページには，各出来事について持っている感情を1. 非常にネガティブから7. 非常にポジティブまでの7段階で評定してもらった。最後に，8ページには，各出来事を経験した年齢を記入してもらった。出来事の想起と感情は，他人と相談することなく記入するよう教示し，最後の出来事を経験した年齢は，正確な年齢が知りたいので，他人に確認してもよいことを付け加えた。

結　　果

幼児期記憶の平均年齢

想起された出来事は，0歳から14歳までの間に経験された出来事であった。想起された出来事を経験した平均年齢を，年齢水準別にTable 1に示す。

4(年齢群)×2(性別）の二要因分散分析の結果，年齢群×性別の交互作用がみられた($F(3,288)=6.763$, $p<.001$)。単純主効果の検定の結果，男性の年齢群に有意な差があった($F(3,288)=6.477$, $p<.001$)。ライアン法による多重比較の結果，男性の30代は，20代，40-50代，60-70代よりも，有意に出来事を経験した当時の想起年齢が高かった($t(288)=3.12$, $t(288)=2.97$, $t(288)=2.71$, $ps<.05$)。また，30代では男性が女性よりも有意に想起年齢が高かった($t(1,288)=2.71$, $p<.05$)。

想起された出来事の感情

7段階評定された感情の年齢水準別平均値をTable 2に示す。4（年齢群）×2（性別）の二要因分散分析を行ったところ，性別の主効果が有意であり($F(1,288)=4.410$, $p<.05$)，女性は男性よりも感情の評定値が高かった。また，年齢×性別の交互作用がみられた($F(3,288)=2.677$, $p<.05$)。単純主効果の検定の結果，男性の年齢群に有意な差があり($F(3,288)=3.887$, $p<.01$)，ライアン法による多重比較の結果，20代は60-70代よりも有意に感情の評定値が低かった。また，20代では女性が男性よりも有意に評定値が高かった($F(1,288)=5.357$, $p<.05$)。

Table 1. 想起された出来事を経験した平均年齢（歳）

	女　性	男　性
20代	4.6	4.6
30代	4.5	7.1
40-50代	4.9	6.1
60-70代	5.3	4.9

Table 2. 想起された出来事の感情：7段階評定値の平均

	女　性	男　性
20代	5.3	1.9
30代	4.1	3.3
40-50代	5.6	3.0
60-70代	4.4	4.5

Table 3. 入園式エピソードと引っ越しエピソードの経験年齢別想起人数（人）

経験年齢（歳）	入園式		引っ越し	
	想起可	想起不可	想起可	想起不可
0	0	0	0	1
1	1	0	1	1
2	0	2	1	0
3	6	6	3	6
4	13	8	9	4
5	21	15	7	2
6	2	4	7	1
7	1	0	2	0
8	0	0	1	0

出来事カテゴリー

どのような出来事カテゴリーに含まれる出来事が多く報告されたのかを比較してみる。Usher and Neisser (1993)が定めたカテゴリーである，一日以上の入院，妹，弟の誕生，親族の死，引越し，に当てはまる出来事はそれぞれ，2個，6個，8個，3個，の計19個であった。これらのカテゴリーを拡大解釈して以下のようなカテゴリーとすると，怪我（他人含む），誕生に関すること，死（友人や動物を含む），引越し，に当てはまる出来事はそれぞれ，42個，10個，14個，3個，の計69個であった。そのほかに複数想起された出来事カテゴリーとしては，旅行14個，注射等7個，初めて幼稚園に行った

日5個，火事7個，誘拐2個，能力5個などがみられた。Usher and Neisser が指定したカテゴリーに当てはまる出来事の自由想起率はかなり低いということができるであろう。

入園式エピソードと引越しエピソード

幼稚園の入園式エピソードと引越しエピソードの経験年齢別想起人数を Table 3 に示す。引越しエピソードは118名中46名しか経験していなかったのに対して，入園式エピソードは79名が経験していた。

各エピソードについて想起できた人数と想起できなかった人数の割合が，出来事を経験した年齢が3歳前後で変化するかどうか調べるために，カイ二乗検定を行った。入園式エピソードを想起できた人数と想起できなかった人数について，3歳と4歳の比較を行ったところ，有意な差はなかった ($\chi^2=0.44$, n. s.)。4歳と5歳についても検定を行ってみたところ，有意な差はなかった ($\chi^2=0.07$, n. s.)。引越しエピソードについても同様に，3歳と4歳の比較，4歳と5歳の比較における有意差はなかった ($\chi^2=2.76$, n. s.; $\chi^2=0.20$, n. s.)。

考　　察

幼児期記憶の想起年齢

女性では年齢があがるにつれて想起されるエピソードの想起年齢が高くなる傾向がみられるのに対して，男性では，30代において有意に想起年齢が高くなっている。また，30代でのみ性差がみられ，女性よりも男性の方が，想起年齢が高くなっている。このように，幼児期記憶において性差・年齢差が見られたことから，幼児期記憶を調査する際には，被験者の年齢や性別を考慮にいれる必要性があるといえる。

しかし，これらの差が，想起を行う年代が過ごした幼児期の特徴による差なのか，それとも検索時の被験者の心的状態の差によるのかどうかは明白ではない。被験者がどのような社会的状況の中で幼児期を過ごしたのかということは，後に想起される出来事の特徴に影響を与える可能性があると考えられる。しかし，想起された出来事の中で，被験者が幼児期を過ごした時代に特徴的であると思われるような出来事の想起は見られなかった。このことから，被験者が幼児期を過ごした社会的状況よりもむしろ，被験者が想起時にどのような心的状態にあったのかということの方が，想起される出来事の特徴に影響を与えると考えることができる。

幼児期記憶の感情

7段階評定による分析では，性差と年齢群の差がみられた。従来のような，肯定的・否定的・中立的という感情の三分類による方法ではなく，7段階評定によっても，感情の違いがみられることが示された。また，感情には，性差だけではなく，被験者の年齢差もみられることが示された。

Neisser (1988) は，概念的自己 (conceptual self) という例をあげて，遅い更新処理について検証している。この説明では，ルールにおける例外が貯蔵されていき，徐々にルールが更新されていくとする。自己については普通比較的肯定的なイメージがもたれている。しかし，自分が原因となる不快な出来事は自己のイメージの範囲からははずれており，そのため例外として常に想起されるであろう。このことから，2つの仮説が考えられる。まず，自分自身が不快さの原因であるときは，自分以外が原因であるときよりも，それに関わる出来事を想起しすいであろう。そして，自分がある程度の不快さの原因であるときは，同じ程度の楽しさの原因であるときよりもそれに関わる出来事を想起しやすいであろう。そして反対仮説としては，自分自身による不快な出来事は，抑圧，または変容されるという説であり，Greenwald (1980) によれば，自分以外の原因による不快な出来事の想起の方が，自分自身が原因である出来事の想起よりも多く，また楽しい出来事のほうが想起が多いということになる。Wagenaar (1992) は，自分が原因である場合，自分以外が原因である場合の，快・不快両出来事の想起について調査を行った。その結果，自分が原因である不快な出来事は，自分以外が原因である不快な出来事よりも想起が多く，自分が原因である不快な出来事は，自分が原因である快の出来事よりも想起が多かった。この結果から，肯定的な自己概念に対する例外は，想起される率が高いと説明できる。

本研究では，20代の男性が不快な出来事を想起する率が高いのに対して，60–70代の男性は快の出来事の想起率が高かった。20代の男性は，青年から成人へと成長し，学生から社会人になるという変化の中で，自己概念を更新することが特に必要になってくるのかもしれない。それに対して，人生の半ばを超えた60–70代の男性は，自己概念を更新するというよりは，自己を肯定的にみつめなおすことが必要なのかもしれない。それに対して女性では大きな変化はみられなかった。男性と比較して，自己概念が大きく変化する機会が少ないのであろうか。

出来事を限定した想起方法

引っ越しエピソードにおいて，本研究では，3歳以前に経験した場合には想起不能であるが，3歳以降に経験した場合には想起可能であるという明白な結果は得られず，Sheingold and Tenney (1982), Usher and Neisser (1993) の結果を再現することはできなかった。入園式エピソードにおいても同様に，3歳以前と以降における差はみられず，そのため，Usher and Neisser (1993) が定めたカテゴリー以外の出来事でも，3歳前後で想起可能・不可能の分離が生じるのかどうか，検討することはできなかった。引越しエピソードにおいて，先行研究の結果が再現されなかった理由として，本研究では，3歳前後でこれらのエピソードを経験した人数が少なかったことが考えられる。3歳前後でこれらのエピソードを経験したことのある被験者について，より多くのデータを集めることにより，カテゴリーを特定する必要性について，更に検討していく必要があるであろう。

また，自由想起において，Usher and Neisser (1993) の提唱したカテゴリーに含まれるエピソードの占める割合は低く，4つのカテゴリーに含まれる出来事が被験者にとって興味深い出来事であるとはいえない。同様に，Sheingold and Tenney (1982) は，兄弟の誕生という出来事を特定することによってエピソード想起の調査を行った。そして，3歳以下の年齢で兄弟が誕生した場合には，兄弟の誕生というエピソードを想起できないという結果を示した。しかしこの研究は，ただ1つの出来事について，それも子どもが興味を持っていると大人が判断した出来事についての想起であった。しかし，記憶の構造の変化について理解するためには，何を想起するのかを被験者自身に選択させる必要があるのではないだろうか。自伝的記憶は，世界と相互交渉のある，自然な結果としての記憶である。研究者の側で想起する材料を決定せず，被験者の自由想起にまかせることにより，記憶の量や想起された出来事の時期だけではなく，何を覚えているのかという質を調査することができるのである (Fivush & Hamond, 1990)。

Colegrove (1899) は，様々な時期の自伝的記憶データの質的調査を行っている。その結果，10歳から14歳ではこの年齢に典型的であるいたずらの記憶が多く，14歳から19歳になると，自分以外に対する広い興味が想起対象となる。20歳から29歳では，新奇な記憶と繰り返した経験の記憶で占められ，30歳から39歳では，より思慮深い，内省的な記憶で占められる。60歳以上になると，他の時期にみられた聴覚的，触覚的記憶が減少する。このことから，記憶は単に検索されるのではなく，現在の興味から再構成されるとしている。本研究では，幼児期記憶の年齢と感情という観点からのみ，年代差を検討したが，今後，想起されたエピソードの質についても更に検討していく必要があるであろう。

引用文献

Bartlett, F. C. 1932 *Remembering: A study in experimental and social psychology.* Cambridge University Press.

Colegrove, F. W. 1899 Individual memories. *American Journal of Psychology*, **10**, 228–255.

Cowan, N. & Davidson, G. 1984 Salient childhod memories. *Journal of Genetic Psychology*, **145**, 101–107.

Crovitz, H. F. & Quina-Holland, K. 1976 Proportion of episodic memories from early childhood by age. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **7**, 61–62.

Crovitz, H. F. & Schiffman, H. 1974 Frequency of episodic memories as a function of their age. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **4**, 517–518.

Dudycha, G. J., & Dudycha, M. M. 1933 Some factors and characteristics of childhood memories. *Child Development*, **4**, 265–278.

Dudycha, G. J., & Dudycha, M. M. 1941 Childhood memories: A review of the literature. *Psychological Bulletin*, **38**, 668–682.

Fivush, R., & Hamond, N. R. 1990 Autobiographical memory across the preschool years: Toward reconceptualizing childhood amnesia. In R. Fivush & J. A. Hudson (Eds.), *Knowing and remembering in Young children.* New York: Cambridge University Press. pp. 223–248.

Franklin, H. C., & Holding, D. H. 1977 Personal memories at different ages. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **29**, 527–532.

Freud, S. 1905/1953 Fragment of an analysis of a case of hysteria. In Strachey, J. (Ed.), *The standard edition of the complete Psychological works of Sigmund Freud (Vol. 15–16).* London: Hogarth Press. pp. 243–496.

Greenwald, A. G. 1980 The totalitarian ego: Fabrication and revision of personal history. *American Psychologist*, **35**, 603–618.

Howes, M., Siegel, M., & Brown, F. 1993 Early childhood memories: Accuracy and affect. *Cognition*, **47**, 95–119.

McCormack, P. D. 1979 Autobiographical memory in the aged. *Canadian Journal of Psychology*, **33**, 118–124.

Neisser, U. 1988 What is ordinary memory the memory of? In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory.* New York: Cambridge University Press. pp. 356–373.

Pillemer, D. B. 1984 Flashbulb memories of the assassination attempt on President Reagan. *Cognition*, **16**, 63–80.

Rubin, D. C. 1982 On the retention function for autobiographical memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **21**, 21–38.

Rubin, D. C., Wetzler, S. E., & Nebes, R. D. 1986 Autobiographical Memory across the lifespan. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory.* Cambridge University Press.

Sheingold, K., & Tenney, Y. J. 1982 Memory for a salient childhood event. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed.* San Francisco: W. H. Freeman & Co. pp. 201-212.

Usher, J. A. & Neisser, U. 1993 Childhood amnesia and the beginnings of memory for four early life events. *Journal of Experimental Psychology: General*, 122, 155-165.

Wagenaar, W. A. 1992 Remembering my worst sins: How autobiographical memory serves the updating of the conceptual self. In A. Conway, D. C. Rubin, H.Spinner, and W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory.* Kluwer Academic Publishers. pp. 263-274.

Waldfogel, S. 1948 The frequency and affective character of childhood memories. *Psychological Monographs*, 62, 1-34.

Wetzler, S. E., & Sweeney, J. A. 1986 Childhood amnesia: An empirical demonstration. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory.* Cambridge, England: Cambridge University Press.

White, S. H., & Pillemer, D. 1978 Childhood amnesia and the development of socially accessible memory system. In J. Kihlstrom & J. Evans (Eds.), *Functional disorders of memory.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.